

The Quantity Theory of Money by Locke

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥山, 忠信 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/572

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロックの貨幣数量説

The Quantity Theory of Money by Locke

奥山 忠信

OKUYAMA, Tadanobu

貨幣数量説の創始者の一人ジョン・ロックの理論を考察する。ロックは、貨幣の価値を「想像的価値」とすることで、貨幣価値の擬制性を明確にし、その決定を需給関係に依存するものとした。このことによって、貨幣量の増加が物価の上昇に帰結するという貨幣数量説が出来上がる。ロックの理論は、重商主義的な見解と貨幣数量説とが並存しているが、貨幣を富と考えその蓄積を目指す重商主義と、貨幣量の増加は貨幣価値の低下と物価の上昇をもたらすだけで富の増加ではないとする貨幣数量説とは、一般的には共存し得ない。しかし、当時、製造業の発展のためには「貨幣不足」の問題を解決する必要があった。ロックは、繁栄を極めていたオランダを政策目標としつつ、貿易差額による貨幣量の増加によって国内の交易を活性化させることと、貨幣量の増加によって生じると考えられる利率の低下によって貨幣不足の問題を解決し、積極的に産業の活性化をはかることを企図していた。このために貨幣数量説と重商主義理論の双方がともにロックにとって不可欠の理論となった。

序言

貨幣数量説の考え方は、本来、物価の上昇の原因を貨幣量の増加に求めるものであり、その起源についてブラウグ (Mark Blaug) は、既に16世紀の文献に見受けられる、と語っている¹。いわゆる価格革命と呼ばれる時期であり、コロンブスの「アメリカ発見」以降、中南米から金銀がヨーロッパに流入したことがその原因と考えられていた。本稿で考察するのは、貨幣数量説の創始者の一人、ジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) の理論である。ロックは、哲学者として著名な学者であるが、当時の鑄貨論争と利子論争に関わり、

自ら経済政策の提言を行うとともに、この過程で貨幣数量説を確立している。エリティス (Walter Elitis) によれば、ロックは以後200年にわたるイギリス通貨安定のための基礎を作った人物と評される²。なお、本稿は、ロックの貨幣数量説を検討するものであり、彼の鑄貨論と利子論は本稿の直接の検討対象ではなく、貨幣数量説と関係する限りで言及することとする。

ロックの貨幣数量説が含まれている著作、「利子の引下げと貨幣価値の引上げの結果に関する考察」 (*Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest and the Raising the Value of Money*, 1691、

キーワード：ロック、貨幣数量説、重商主義、想像的価値

Key words : Locke, the Quantity Theory of Money, Mercantilism, Imaginary Value

以下「考察」と略記）の刊行は、コロンブスの渡航から200年、時代は重商主義の時代であった。

アダム・スミス（Adam Smith, 1723-1790）は、『国富論』（*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776）の中で重商主義を次のように紹介する。

「富者の場合と同様に、富国とは貨幣が豊富にある国のことだと考えられており、また金銀のある国に蓄蔵することが、その国を富ませるもっとも容易な方法だと考えられている」（Smith[1981], p.430, 第2分冊, 260頁）

重商主義は、金や銀の貨幣を富として重視し、その国内への蓄積を政策課題とする³。ロックの貨幣数量説をめぐる問題はここに生じる。ロックは、後に検討するように明確な重商主義政策の支持者であった。すなわち、金や銀の貨幣がイングランド国内に流入することを目的とする政策を唱えていた。アダム・スミスはロックについて次のように語っている。

「金と銀とは彼（ロックを指す。・・・奥山）によれば、国民の動産的な富のうちでもっとも堅実で実質的な部分であり、その理由から、それらの金属を増加させることは、彼の考えるところでは、その国民の経済政策の大目的とされるべきものである」（Smith[1981], I, p.430, 第2分冊, 261頁）

ここにひとつの問題が生じる。重商主義と貨幣数量説は両立しえるのか、という問題である。ヒューム（David Hume, 1711-1776）によって定式化された貨幣数量説⁴は、貨幣量の増大は物価を上昇させるだけで、経済には何の効果ももたらさないとする学説である。ここで物価の上昇とは貨幣価値の下落と同じであるから、貨幣量の増大は、国内の貨幣価

値の下落を意味し、その蓄積は富の増大にはならないということになる。それだけでなく、ヒュームは貨幣数量説を一步踏み込んで重商主義批判の学説として確立している。ヒュームの観点からすると貨幣数量説と重商主義の政策とは根本的に矛盾することになる。

このことは理論のベースとなる貨幣観ともかかわってくる。ヒュームは貨幣数量説を背景に貨幣を「富」ではなく「交換の道具」であるとみなす。数量が増えれば価値が下がるものは、増加させる意味がないからである。また、ヒュームの親友であったスミスは貨幣数量説を採用したわけではないが、ヒュームの貨幣＝道具説は採用している。貨幣＝道具説も貨幣数量説も、19世紀の主流学説となる。レイドラー（David Laidler）によれば、「今日貨幣経済学が最も重視している貨幣の機能は価値の貯蔵であるが、1870年代にはそうではなかった」（Laidler[1991], p. 8, 7頁）。ヒュームの貨幣＝道具説は19世紀をとおして、経済学の主流派の受け入れるところとなる。この見解は、現在でも最も影響力の強い考え方である。そして、貨幣数量説は、1980年代以降、主流学説としての地位に復帰している。

ところが、ロックについては事情は異なる。彼は貨幣数量説に基づいて重商主義の経済政策を唱えている。ロックは貨幣数量説の理論的創成期に位置しているために混乱していたのであろうか。あるいはロックの時代には、貨幣数量説と重商主義が共存しえたのであろうか⁵。また、場合によっては、むしろヒュームによって定式化された重商主義批判としての貨幣数量説に無理があったのであろうか⁶。以上の問題関心を踏まえ、ロックの貨幣数量説を考察したい。

I 重商主義と貨幣

スペインやポルトガルが中南米を支配するようになると、そこから金や銀が大量にヨーロッパに流れ込み、重商主義の時代が地球規模で開花する。金や銀がスペインを經由してヨーロッパに浸透することで、重商主義が発展すると同時に、貨幣としての金銀はよりいっそう普遍的な富となった。金と銀という素材は、高い審美性を持つだけではなく、限りなく不滅で、それが貨幣となることによって、これさえ持っていれば、その保存可能性と普遍的な購買力によって、その所有者は、遠い将来までいつでもなんでも手に入れることができることとなった。このため、金と銀の貨幣は、貨幣として使用され、商品経済の下での最も一般的な富となった。

ロックは『政府二論』(*Two Treatises of Government*, 1690)の後篇第5章の中で、所有の根拠を自己労働に基づく自己所有とする労働所有権論を説くとともに、貨幣が社会にもたらした深刻な影響について分析する。すなわち、ヨーロッパの封建社会の中に貨幣が登場し浸透することによって社会の中に貧富の差が拡大し、大きな混乱がもたらされたというのである。

その原因をロックは貨幣(金や銀)が素材的に腐らないからだ、と説明している。腐らない貨幣は無限に蓄蔵することが可能で、このことが社会に貧富の差をもたらしたというのである。貨幣が、金や銀のような不滅の素材でなければ、貨幣自体が消耗してしまうので蓄蔵には限界があり、このため大きな貧富の差は生まれなかったことになる。ロックは「貨幣の価値の引上げに関する再考察」、(*Further Considerations Concerning Raising*

the Value of Money, 1695、以下、「再考察」と略記)の中で次のように言う。

「金は銀と同様に財宝である。なぜならそれは保蔵しても腐食せず、またその価値が決して大幅に下落しないからである」(Locke [1963], p.152, 246頁)

「他の諸金属は財宝ではない。なぜなら、それらは保蔵すると腐食するし、…」(Locke [1963], p.152, 246頁)

金と銀の貨幣としての適格性は、それだけではない。金と銀は、素材が均質であることから正確な価値表現の手段となり、貨幣の価値尺度機能を正確に果たす。そして品質が変化しないことから、購買手段として、また契約の手段として、また価値の保蔵手段として機能する。そして、体積に対して価値が大きいことから、持ち運びに便利であり、交換手段として転々と持ち手を替え商品流通の中を循環する。すなわち、金と銀は貨幣にふさわしい性質を持つことから貨幣になったのである。

そして、ロックは次のように言う。

「金と銀とは、ほとんど役立つないけれども、それは生活のあらゆる便宜品を支配する。したがって富は金銀の豊富さに存するのである」(Locke [1963], p.12, 15-16頁)。

しかしながら、貨幣の登場は物々交換の不便を解消し、商品交換を便利にするだけにはとどまらなかった。貨幣によって消費するための商品を買うのではなく、貨幣を増殖のために使用する職業の担い手、すなわち商人が生まれる。貨幣を増やすことを目的に貨幣を使用するのである。トレードが商人の貨幣増殖願望を満たす手段となる。貨幣の増殖は価格差によってもたらされるため、交易は珍しいものを求めて遠隔地に向けて広がっていく。

重商主義の時代、商人の活躍の舞台は、地中海を越えて世界へと広がる。

しかし、金山や銀山の支配は、金銀の増加を直接的に達成する方法であった。スペインは、アメリカ大陸の金や銀の鉱山を支配した。これに対し金や銀の鉱山を持たないオランダやイギリスやフランスは、外国貿易によって重商主義の覇権争いに参入する。ロックは言う、「われわれは鉱山を持たず、トレードによる以外に、金銀を国内に保持する手段がない」(Locke[1963], p.12, 14頁)、と。そして、「スペインでは貨幣を輸出すると死刑になる。にもかかわらず、世界中に金銀を供給する彼らは、国内にほとんど金銀を残していない。…金銀は厳格な法律に逆らってトレードに従い、外国商品に対する彼らの欲求は公然と真昼間に金銀を持ち出させる」(Locke[1963], p.112, 72頁)、という。外国貿易、すなわち貿易差額を利用することによって、富（金や銀の貨幣）はスペインから合法的にオランダそしてイギリスへと流れてくる、金銀の流出を規制しても無駄である、と。

もともと重商主義の前期は重金主義（bullionism）と呼ばれ、貨幣（金銀）の海外への持ち出しを認めなかった。しかし、ミッセルデン（Edward Misselden, 1608-1654）そして東インド会社の重役であったマン（Thomas Mun, 1571-1641）の提言によって、貿易差額主義が基本的な政策になる。すなわちマンは、イングランドの貨幣を海外へ持ち出しても、より多くの貨幣を持ち帰ればよいとして貿易差額主義を唱え、これが重商主義の合理的な政策となったのである。

重商主義の代表的な教科書であったといわれるマンの『外国貿易によるイングランドの財宝』（Englan's Treasure by Forreaign Trade,

1664）は、次のように言う。

「わが国の富と財宝を増加するための通常的手段は、外国貿易によるのである。その場合にわれわれが常に守らなければならない原則がある。すなわち、年々、われわれが消費する外国商品の価値額よりもより多くを外国人に販売しなければならない、ということである」(Mun[1986], p.5, 17頁)

そして、220万ポンドを輸出して200万ポンドを輸入するならば、毎年20万ポンドずつ、金銀の貨幣がイングランドに入り込むので国は豊かになる、と説かれている。

マンの『財宝』は、金銀貨幣を富とみなし、貿易差額によってこれを増やそうとする重商主義の「国富」論であった。重商主義は国力を貨幣量の多寡で見えており、貿易差額はその手段であった。

ロックもマンを継承して「富は、金銀をより多量に所持することに存するのではなく、世界の他の国々、あるいは近隣の国々比べてより多量に所持することに存する」(Locke [1963], p.12, 16頁)、と説き、「外国貿易（trade）は富を生み出すために必要であり、貨幣は外国貿易を行うために必要である」(Locke[1963], p.14, 18頁)、というのである。

ところで、貨幣を多く持つことの利点は何か。「再考察」の中でロックはこの問題を次のように整理している。

「貨幣はまた隣邦諸国の貨幣の豊富さにある程度比例を保ってわが国に存在することが必要である。というのはわが国のいずれかの隣邦がわが国よりはるかに豊富に貨幣を持っているとすると、われわれは彼らからさまざまな形で危害を受けやすいからである。第1に、彼らはより強大な軍勢力を維持しうる。第2に彼らはより高い賃金でわが国の人民を

誘い出し、彼らに陸上か海上で何らかの労働を提供することができる。第3に、彼らは市場を支配し、それによってわが国のトレードを破壊させ、われわれを貧乏にすることができる。第4に彼らはいかなる時機にも陸海軍需品を買占め、それによってわが国を危機に陥らすことができる。」(Locke[1963], p.148, 239頁)

第1点と第4点は、軍事力に焦点を置いた説明であり、重商主義の金銀への渴望の特徴の一つである。ここに重商主義者としてのロックが現れている。第2の点は、「考察」でも指摘されていることで、高賃金に魅かれて人材が動くことが指摘されている。第3の点については、説明が必要である。まず貨幣の欠乏が国内の産業を破壊することは、ロックの最も基本的な考えであり、この点は後に考察する。また、「考察」の中では、貨幣が豊富にあって価格が高い国の利点を次のように言う。すなわち、貿易商人は、金と銀の分量を尺度にして商品を販売するので、貨幣が少なく物価の低い国よりも貨幣が豊富にあって物価の高い国の方に商品を売ることになるというのである⁷。

そして、貨幣としての金銀の増加は、国家的な政策として不可欠であり、「外国からいっそう多くの貨幣を持ち込むことは、王国が富に関していただく唯一の関心事」([Locke], p.62, 96頁)と主張する。貨幣をより多く持った国が繁栄した強国であり、貨幣量の増大のために必要な手段として外国貿易と貿易差額主義を明確に支持するのである。本稿「序言」においてスミスからの引用で見たように、ロックは、明確な重商主義者であったといえる。

しかし、補足すれば、貨幣は自己目的とし

て無限に求められているのではなく、ロックにあっては、相対的に近隣諸国の中で一番多ければ問題はないと考えられていた。すなわち、ロックは、「富は、金銀をより多量に所持することに存するのではなく、世界の自余の国々あるいは隣邦諸国に比してより多量に所持することに存する」(Locke[1963], p.13, 16頁)」と述べているのである。

つづいてロックの貨幣数量説を見てみよう。

Ⅱ 貨幣価値論と貨幣数量説

ロックは貨幣の機能について次のように言う。

「貨幣はこれらすべての人にとって計算用具(counters)および保証物(pledges)の両方に役立つものとして必要である。…このうち前者は、刻印(stamp)と呼称(denomination)によってなされ、後者はその内在的価値(intrinsic value)、すなわち貨幣の分量(its quantity)によってなされる」(Locke[1963], p.22, 31頁)

ここで、貨幣の機能は、価値の計算用具と保証物の2大機能として考えられている。価値の「計算用具」と言うのは、通常「価値尺度」と呼ばれる機能である。すなわち、円やユーロといった貨幣の単位がテレビ1台10万円というように価格表現の単位として使われる機能である。保証物とは購買や契約やその決済のための支払手段となる貨幣機能を指す。

また、貨幣機能を2つにまとめる見解は、当時の通説といえる。価格表現の材料となる貨幣は観念的に存在して計算上役立てばいいのであるが、鑄貨としての貨幣は現実存在し、購買手段や支払手段として機能する必要がある。すなわち、貨幣の機能を観念的な存在と鑄貨としての現実的な存在とによって二

分しているのである。ジェームズ・ステュアートも貨幣機能を計算貨幣と鑄貨に分けている⁸。

ここで問題なのは、「内在的価値」という用語である。ここでの内在的価値は労働価値論や生産費説などに裏付けられた貨幣の購買力を指しているのではない。貨幣としての銀の量そのものを指している。貨幣の分量そのものが「内在的 (intrinsic)」と呼ばれる理由は、貨幣の呼称 (denomination)、すなわち100円とか10000円という呼称に対して「内在的」、すなわち銀の重さそのもの、という意味である。こうした扱いは、当時の鑄貨論争を受けたものである。すなわち、ロックが批判しようとしていた論者たちは、通貨価値の安定のために、摩損したり削り取られたりして銀量が減ってしまった鑄貨に対して、鑄貨単位を引上げることによって、問題を解決しようとしていた。これに対して、ロックは価格の単位の変更 (denomination) には何の意味もないことを主張していたのである。

価格の単位の変更 (denomination) や debasement (純度の引下げ) などの技術的な操作が、貨幣価値にとってどのような意味を持つかは、もちろんそれ自体が別途の検討を必要とする。特に不換紙幣の場合には、デノミネーションに対してさまざまな経済的あるいは心理的な効果が期待されている。しかし、ロックの時代のように、金や銀が貨幣の場合には、こうした政策の効果には限度があると見るべきであろう。ロックは言う。

「貨幣の内在的価値を形成する銀は、それ自身と比較される場合、その国あるいは別の諸国のいかなる刻印または呼称によっても引上げられることはない」(Locke[1963], p.82, 130頁)

「銀はそれゆえ常に銀と同一の価値を持つので、銀貨と比較した銀鑄貨の価値は、その中に含まれている銀が多いか少ないかあるいは等しいかに応じてのみ、大きくも小さくもなる」(Locke[1963], p.82, 130頁)

商品は、銀鑄貨で価値を表現する場合でも、銀の分量を前提に価値を表現している。したがって、貨幣の購買力も銀の分量の持つ購買力がベースになる。鑄貨の呼称単位が、貨幣価値を決めているのではない、とロックは考えるのである。明確に金属主義の立場である。まして、海外との関係では国によって違う貨幣の呼称の単位は何の役にも立たない。これがロックの批判の要点であった。その意味で、貨幣の内在的価値は鑄貨に含まれる銀の分量そのものを指す。

また、ロックは「自然的価値」という用語も使用している。以下のとおりである。

「あらゆるものの内在的自然的価値 (intrinsic, natural worth of any thing) は、人間生活の必要をみたすか便益に役立つかするところの適性に存する」(Locke[1963], p.42, 64頁)。

ここでの「自然的内在的価値」は、古典派やマルクスのいう使用価値 (value in use) のことである。マルクスも『資本論』(*Das Kapital*) において、ロックの「自然的内在的価値」を「使用価値」を意味するものとして引用している⁹。

ロックの貨幣価値論の焦点となるのは次の一文である。

「すなわち人類は金銀に、その耐久性と希少性、およびたやすく偽造されにくいと言う理由で、想像的価値 (imaginary value) を与えることに同意し、一般的合意によって (by general consent) 金銀を共通の保証物にした」(Locke[1963], p.22, 31頁)

これがロックの貨幣価値論といえる。すなわち、貨幣の価値について、ロックは「想像的 (imaginary)」価値と理解する。これによって、個々の貨幣片がそれぞれに固有の内在的価値をもつという考えは否定される。この表現によって、ロックの貨幣価値論は貨幣数量説にふさわしい貨幣価値論へと踏み込んでいく。

マルクスは、「ロックは、金銀に価値がないということと、量によるそれらの価値規定との連関を単刀直入に語っている」(Marx [1969], S.138, 219頁)と述べて、上記と同じ箇所を引用している。貨幣数量説が理論的に確立するには、こうした貨幣価値論が必要となる。ヒュームは、貨幣の価値を「犠牲的価値 (fictitious value)」と表現している¹⁰。貨幣価値論としては、ロックとヒュームは同じであったと考えられる。

貨幣の価値が想像的価値であるとする、それはどのように決まるか。ロックはこの問題にたびたび言及している。

「貨幣の価値の尺度は、その量 (quantity) と捌け口 (vent) だけであり・・・」(Locke [1963], p.32, 48頁)

「あらゆる商品——貨幣もそのひとつである——におけるこの比率は、それらの数量の販路に対する比率のことである。」(Locke [1963], p.43, 65頁)

貨幣の価値は、需給関係によって決まるといのが、ロックの考えである。すなわち、貨幣の価値が、生産費説や労働に裏付けられた固有の内在的価値によって決まるとい考えはロックにはない。また、この需給説は次のように補足される。

「しかし、貨幣に対する欲求は常時存在し、ほとんどどこでも同一不変であるから、・・・

その販路はめったに変化しない。それゆえ貨幣量の減少は、常にその価格を上昇させ、等量の貨幣をより多くの商品と交換させる」(Locke [1963], p.40, 60頁)、と。貨幣は他の商品とは異なり需要はあまり変化しないので、もっぱら貨幣の存在量あるいは供給量の方が貨幣の価値を決定する、というのである。

この貨幣価値論にもとづくロックの貨幣数量説を象徴する一文は、次のとおりである。

「現在、世界には、銀が当時の10倍存在するので (西インド諸島の発見が銀を豊富にした) 銀は今では当時よりも10分の9価値が小さい。すなわち銀は、今では、販路に対して200年前と同じ比率を保っているどの商品とも、10分の9少なく交換される」(Locke [1963], p.47, 71頁)

この表現は、貨幣数量説の説明としては、わかりやすい説明である。しかし、貨幣数量説としては、いわば抽象化された理論モデルである。貨幣数量説に即してもこの説明が成り立つには、さまざまな条件が必要であり、銀が10倍になることはあっても、物価が現実には10倍になったわけではない。アダム・スミスは『国富論』の中で、物価は3倍になったとして、その影響を分析している¹¹。

ロックからの引用文の特徴は、金や銀の貨幣量の増加はそのまま貨幣価値の減少を意味すると考えていることである。一般的に言えば、貨幣量の増大と物価との比例関係を認め、この2つの間の因果関係を貨幣量の増加が原因で物価の上昇が結果である、と考えることが貨幣数量説の主要な特徴である。この考え方の延長に、一国に貨幣量 (金銀) が増加すれば、貨幣価値が減少するのだから、物価が上昇するだけで何の意味もないという考えが導かれ、いわゆる貨幣の中立性や重商主義批

判の見解が導かれる。貨幣が「富」ではなく「道具」であるとする見解の根拠ともされる。

しかし、重商主義が貨幣量の増加の中に富の増加を認めるならば、貨幣としての金銀には、個々の貨幣片に固有の内在的な価値があり、それは貨幣量によっては影響されない、考える必要がある。ロックが重商主義を採りながら貨幣数量説を唱えた意味が問われざるを得ないのである。

Ⅲ 貨幣数量説の諸問題

前節ではロックにおける貨幣数量説の展開を見てきた。しかし、ロックの貨幣数量説は、より踏み込んだ内容をもっている。それは、「貨幣とトレードの間には一定の比率が存在しなければならない」(Locke[1963], p.49, 74頁)と考えていることである。貨幣の需給関係だけで貨幣価値が決まるとは考えていないことである。すなわち、貨幣と商品との相対的な関係で貨幣価値が決定すると考えているのである。

「任意の他の商品の多寡または販路に対する貨幣の多寡の比率以外に、貨幣の価値を上げたり下げたりしうるものはない」(Locke[1963], p.82, 130頁)

「貨幣によって購買しうる任意の物品に対する貨幣の価値の尺度は、その物品の量とその販路とに比してわれわれが所有する現金の量によって定まる」(Locke[1963], p.31, 45頁)

流通する商品量と貨幣量の間には一定の関係があることを指摘しているのである。

要するに、貨幣量だけが貨幣価値を決定するのではなく、商品量との関係で貨幣価値が決定されると考えられているのである。貨幣量が増えても、取引される商品量が増えれば、物価は上がらないし、貨幣価値は下がらない

ことになる。また、物価の変動は、商品の側からも貨幣の側からも生じることになる。ロックの重商主義は、貨幣の増加を自己目的としているのではなく、商品流通量と貨幣量との関係を考慮に入れているのである¹²。

さらに、貨幣数量説で言う時の貨幣量の意味が問題となる。貨幣は一般的な富であるがゆえに退蔵されることもある。国家も個人も万が一の危機や遠い将来への保証などさまざまな動機で貨幣を溜め込む。こうした貨幣が物価に影響するかどうかは貨幣数量説の前提をなす問題として重要である。

ロックは次のように言う。

「貨幣の価値は一般的には全トレード[量]に比しての世界の全体の貨幣量のうちにあるが、ある一国における貨幣の価値は、その国の現在のトレード[量]に比しての現在の流通貨幣量であるからである」(Locke[1963], p.49, 74-75頁)

「貨幣の自然的価値は、王国の全トレード、全商品の一般的販路に比してのその時点における流通貨幣量に依存している。しかし、ある一商品と交換される場合の貨幣の自然的価値は、その単一商品およびその販路に比してのその商品に向けられた王国の貨幣取引に依存している」(Locke[1963], p.46, 70頁)

「同一量の貨幣がトレードのため王国内を行き来している間は、貨幣は実際に他の物品の不変の価値尺度であって、価格の変化はまさしくそれらの物品の側だけのことである。しかし、ある地域において流通している貨幣量が増減する場合には、価値の変化は貨幣にも起こる」(Locke[1963], p.44, 68頁)

ロックは、存在する貨幣のすべてではなく、現に流通している貨幣量を問題にしているのである。

以上の点を考慮すれば、物価の変化は、貨幣量の増減だけで起こるのではない、ということになる。商品量が増えた場合には貨幣の量もそれに見合っただけで増えなければ、物価は上昇するのである。あるいは、200年間で銀の量が10倍になったとしても、商品の量が10倍に増えていけば、貨幣価値が10分の1になることもなければ、物価が10倍になることもなく、価格は一定のままなのである。また、貨幣量の増加だけが物価にとっての問題ではなく、流通している貨幣量が問題だということになる。このことから、流通貨幣量を増やすためには退蔵貨幣を減らすことが政策的に重要な課題となる。

最後に、ロックは、貨幣の流通速度の問題を指摘する。すなわちロックは、トレードにはある一定の比率の貨幣が必要であるが、その割合を決定するのは難しいとして、その理由を「なぜならそのことは、貨幣の量のみならず、その流通速度にも依存している」(Locke[1963], p.23, 34頁)からであるとして、「まったく同一のシリング貨でも、20日間のうちに20人の手に渡る時もあるれば、100日間同一人の手にとどまる時もある (Locke [1963], p.23, 34頁)」と説明している。

また、賃金や地代などの支払いの慣習を詳細に分析している¹³。いうまでもなく貨幣数量説が機械的に成立するためには、流通速度は一定となっている必要がある。ロックは、流通速度が安定的であることを記述しているが、その意味は貨幣数量説を補強するためではなく、貨幣の使用は慣習や制度に基づいており、このため社会には一定の貨幣量が必要で、この必要な貨幣量が確保されていなければ支障をきたすことを論じることにあった。

ロックは、中南米からの金や銀の流入に

よって物価が騰貴したことを論じていたが、これは貨幣価値の不安定性を語ったものではない。実際には貨幣価値は安定しているとして、次のように述べている。

「貨幣は少ししか消耗も増加もしない・・・貨幣は、その量と販路の比率が他のたいていの商品よりも緩慢にしか変化しないので、通常あらゆる物品の価値を判定する不変の価値尺度とみなされている」(Locke[1963], p.44, 67頁)

むしろつづいて見るように、ロックは貨幣数量説と貿易差額説を両立させることによって、「貨幣の不足」の問題を解決し経済を活性化させる方策を見出そうとしていたのである。

IV ロックにおける貨幣数量説と重商主義

ロックの関心は、「貨幣の不足」問題を解決し、産業を活性化させることにあった。本稿でもっぱら取り上げている「考察」のなかで、ロックは、「第一に考察すべき主題は、貨幣の貸借の価格は法律によって規制できるのかどうかである」(Locke[1963], p.4, 3頁)、と述べている。

当時の利子の引下げをめぐる論争において、法による利子の引下げによって経済を活性化させることを主張した論者に反対し、ロックは、利子率の低下や経済の繁栄は貨幣量の増大の結果であることを説き、利子率の低下のための別の政策を唱えたのである。それは、貨幣の退蔵を避けることと、貿易差額によって貨幣を増加させることであった。

当時声高に叫ばれていたのは、「貨幣の不足」であった。「貨幣の不足」という問題は、さまざまな内容をもっている。資本主義の生成期は、実物経済から貨幣経済の移行期でも

あり、文字通りの意味での貨幣の不足の問題もあった。たとえばロックが「借地農は労働者に支払う貨幣がないため、穀物で支払っているが・・・」(Locke[1963], p.24, 35頁)、と述べているように現実的な問題としての貨幣そのものの不足の問題が重要であった。しかし、スミスはやや冷やかに次のようなケースも指摘している。

「しかし、貨幣の不足についての不平ほどよくある不平はない。・・・貨幣の不足についてのそうした一般的な不平さえも、必ずしも常に、通常数の金銀貨が国内に流通していないことを証明するものではなく、それが証明するのは、金銀貨と引換えに与えるべきものを何ももたない多くの人々が、そうした貨幣片を欲しがっているということ・・・」(Smith[1981], I, p.437, 第2分冊, 273頁)

とはいえ、「考察」でロックが主として問題にしているのは、資金として貸借の対象となる貨幣であった。ロックは、法律によって利子率を低下させようとする主張に反対し、法律によって利子率を下げれば、「国内にはトレードに動かすための貨幣が少なくなるだろう。・・・銀行家は、そうした低利率になると、利率がずっと高い現在よりもいっそう多くの貨幣を手元に退蔵するからである」(Locke[1963], p.8, 8頁)と反論したのである。ロックによれば法律による利子率の低下によって、「国の貨幣が退蔵され、その結果トレードに損害を与えることのないように」(Locke[1963], p.12, 15頁)することが、最も重要なことなのである。なぜなら、「いかなる国でも、この割合より現金が不足するだけ、それだけトレードは、貨幣の不足のために損なわれ、妨害されるに違いない」(Locke[1963], p.28, 42頁)し、製造業こそはもっとも潤沢な資金

をもって活動すべき部門だからである。

ロックによれば、発展過程にある製造業の貨幣不足は深刻な問題であった。「われわれはここでもまた、製造業がどれほど奨励に値するかと言うことに気づくであろう。というのは、製造部門のトレードは、もっとも重要であるにもかかわらず、最小の貨幣量で運営され・・・」(Locke[1963], p.29, 43頁)、というのである。

ロックは、利子率の低下を政策的に目指すこと自体が問題ではなく、法律によって利子率を低くすることが問題であると考えた。法律による利子率の引下げではなく、繁栄の結果として利子率を引下げることが重要であった。それは繁栄を続けるオランダの低い利子率に関する次の引用に現れている。

「実際オランダでは、優良な担保さえあれば3%および3.5%で貨幣を借りることが最近あったかも知れないが、それはいかなる法律によるのでもなく、自然利子率(natural rate of interest)によるのである」¹⁴(Locke[1963], p.67, 104-105頁)

「オランダでは利子は低い。しかし、オランダの利子が最初に下落したのはトレードを発展させようとする法律や政府の政治的工作の結果ではなく、多量の現金の結果なのである」(Locke[1963], p.68, 106頁)

「彼ら(オランダを指す・・・奥山)の豊富な貨幣と国債の支払いが、しばらく前から彼らの利子率を下げたのである」(Locke[1963], p.68, 106頁)

すなわち、利子率は法律で決めるべきではなく、貨幣の豊富さの結果として利子率は低くなる。「自然利子率」の概念がそれを表す。そしてこの低い利子率が製造業に繁栄をもたらす。そのためには貨幣が豊富になることが

必要である。

ロックは、「貨幣の価値の尺度はその量と捌け口だけであり、それらは利子の変化によって直接には影響を受けないからである。利子の変化は、それがトレードにおいて貨幣または商品を生出入させることに役立ち、・・・それらの比率を以前あったところから変化させることに役立つ限りにおいて、・・・商品に対する貨幣の価値を変化させるかもしれない」(Locke[1963], p.32, 48頁)、という。貨幣の価値と利子率とは本来は別のことであるが、利子の変化が流通貨幣量したがって貨幣価値の変化に影響することもあると指摘するのである。また、「貨幣の自然利子率が不断に引上げられるのは、一国におけるトレード[量]に比較して貨幣が少ない場合である」(Locke[1963], p.10, 12頁)として、貨幣量の不足が利子率を引上げていることを指摘する。

ここに重商主義の貿易差額主義が関係してくる。ロックは、「考察」の最後のパラグラフで次のように言う。

「いかなる国においても貨幣を増加させるために考える方法は、次の2つだけである。すなわち、自国の鉱山で貨幣を採掘するか、あるいは隣邦諸国からそれを獲得するかのいずれかである。・・・外国人から獲得する方法は、武力か、借入か、トレードかのいずれかによる」(Locke[1963], p.78, 122頁)」

ロックは、重商主義の政策である貿易差額主義は、金銀の貨幣をイングランドに流入させ、貨幣量を増加させることによって、利子率を低下させ、「貨幣不足」を解消して産業に発展をもたらす、と考える。ロックの貨幣数量説と貿易差額説はともに産業の活性化のために必要な理論であったといえる。ロックの貨幣数量説は、貨幣量そのものの増加の効果

や利子率の低下を媒介しての経済効果をもたらすための理論であったといえる。貨幣数量説の主要な内容の一つとして、貨幣量の変化が実体経済に対して何の影響も及ぼさないこと、少なくとも長期的には何の影響も及ぼさないことがあげられているが、その創始者の一人のロックは、それとは逆の意図を持って貨幣数量説を創り出していったのである。

結 語

ロックの重商主義は、その実践的な意図として、貨幣量の増加によって経済を活性化させることを構想していた。貨幣の不足の問題とその積極的な解決策が模索されていたのである。なぜならば、貨幣の不足は、貨幣量の不足そのものから経済を停滞させるし、高い利子率を誘導することによって、繁栄を阻害する。貨幣の豊富にある国は、経済が繁栄し国力も強まり、世界の交易を主導し、国家としても強力になる。貿易差額説による貨幣量の増加はその手段となった。

ロックの貨幣数量説は、貨幣の価値を「想像的価値」とすることで、貨幣価値の変動性を明確にし、その決定を需給関係に依存するものとすることによって、貨幣量の増加が物価の上昇に帰結することを説明するものであった。貨幣数量説の基本的な姿はここにおいて出来上がっている。

とはいえ、ロックにあっては、貨幣量が増えたとしても、物価に影響するのは流通貨幣量だけであり、退蔵貨幣の存在は物価には直接には影響しないが、経済の繁栄のためには退蔵貨幣を減らすことが重要であると考えられていた。さらに、貨幣の使用頻度は支払いの慣習や制度にもよるため、社会には一定の貨幣量が必ず必要であり、必要な量の貨幣が

不足すると経済活動に混乱が起こることが指摘されていた。経済が繁栄するには貨幣量の増大が必要だったのである。

確かに、貨幣量の増加によって高い価格がもたらされるが、それはロックにとってはマイナスではない。すなわち、人材も賃金の高いところに集まり、貿易商人は価格の高い国に商品を売ろうとする。軍需品も買いやすくなる。貨幣が多く価格が高い国の方が市場をリードする立場に立つことができる、と考えられていた。

また、特に貨幣量の増加による貨幣価値の低下は、結果的に利子率の低下につながり、このことが製造業をはじめとする産業に資金を供給し経済の繁栄と強い国家につながる。利子率を法律によって引下げれば貨幣の退蔵を招くが、貨幣の増加から導かれた利子率の低下は、こうした問題を生じない。

ロックにとって貨幣数量説は彼の重商主義理論と相補的な関係を保って経済問題を解決し、繁栄をもたらすための理論だったのである。

注

- 1 ブラウグはサラマンカ学派に起源を求めている (Mark Blaug, etc[1996], p.1, 参照)。また、堀塚文吉郎『貨幣数量説の研究』、第1章においても貨幣数量説の起源が紹介されている (堀塚[1988])。
- 2 Mark Blaug, etc[1996], p.4, 参照。
- 3 重商主義の定義をめぐる諸説については、馬渡 [1997], 12-15頁、参照。
- 4 David Hume[1955]、参照。
- 5 田中正司氏はロック『利子・貨幣論』の解説の中で次のようにいう。「ロックが展開した、流通必要貨幣量説、その確保のための貿易差額説は、貨幣がその数量によらない本来的・内在的価値を

もつことを前提としている点で、貨幣数量説と基本的に矛盾するものであった」(『利子・貨幣論』、365頁)。

- 6 別稿 (奥山[2009]) で論じたように、ステュアート (James Steuart, 1713-1783) は貨幣数量説がヒュームによって定式化されると、これを受けて、大著『経済の原理』(*Principles of Political Economy*, 1767) の中で、包括的な貨幣数量説批判を展開している。その批判は今でも有効性を保っていると考えられる。特にステュアートは、貨幣数量説が貨幣の増加をそのまま有効需要の増加に結びつけるという暗黙の前提を持っていることを批判し、これが根本的な間違いであることを指摘していた。また、ステュアートは貨幣論の本質論において、紙幣を不変の価値尺度の理念的な姿として考えており、紙幣の発行に積極的な意義を認めていた。こうした立場に立つステュアートにとっては、紙幣の発行に批判的なヒュームの貨幣数量説は、相容れないものであったといえる。
- 7 Locke[1963], p.50, 76頁、参照。
- 8 奥山 [2009]、参照。ステュアートは、観念的に存在する計算貨幣の中に貨幣の本質を見る。その上で貨幣の理念的な姿を紙幣の中に見い出して、不変の価値尺度論を展開する。
- 9 Marx [1969]、S.50、第1分冊、61頁、参照。
- 10 Hume [1955], p.48, 70頁、参照。その内容は、「それ (貨幣・・・奥山) の多少は、一国民をそれ自体として考察すれば、少しも重要な意味を持たない」(Hume[1955], p.48, 70頁)、と言うことにある。
- 11 Smith [1981], I, p.447, 第2分冊、290頁、参照。
- 12 馬渡尚憲『経済学史』は、この点を重視する (馬渡 [1997]、39頁)。
- 13 エトリスはロックの取引量と貨幣量との関係に関する論述を立ち上げて検討している (Mark Blaug, etc[1996], pp.11-13)。
- 14 「私の意味する自然利子率というのは、貨幣が平等に配分される場合に、現在の貨幣の欠乏が自然に到達させる金利のことである」(Locke[1963], p.9, 9頁)

文献リスト

- Blaug, Mark, etc [1995], *The Quantity Theory of Money*, Edward Elgar, 1995.
- Elitis, Walter [1995], *John Locke, the theory of money and the establishment of a sound currency*, Blaug, Mark, etc [1995].
- Hume, David [1955], *Writings on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, University of Wisconsin Press, *Political Discourses*, 1752 (ヒューム『経済論集』、田中敏弘訳、東京大学出版会、1967).
- Laidler David [1991], *The golden Age of Quantity Theory of Money*, Harvester Wheatsheaf (『貨幣数量説の黄金時代』、嶋村紘輝他訳、同文館、1991).
- Locke, John [1963], *Works of John Locke*, vol.5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen. Locke [1991], *Locke on Money*, John W. Yolton, ed., Oxford University Press.
- Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692* (『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978).
- Further Considerations concerning Raising the Value of Money, 1695* (『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会).
- Two Treatises of Government*, 1690, Works of John Locke, vol.5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen (『政府二論』、加藤節訳、岩波文庫、2010).
- Marx, Karl [1969], *Das Kapital, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd.23 (『資本論』、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、第1分冊、1982).
- Misselden Edward [1970], *Free Trade and the Means to Make Trade Flourish*, 1622, Da Capo Press Theatrum Orbis Terrarum Ltd, Amsterdam.
- Mun, Thomas [1986], *Englan's Treasure by Forreign Trade*, 1664, rpt. by Augustus M. Kelley (『外国貿易によるイングランドの財宝』渡辺源次郎訳、東京大学出版会、1965).
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, Ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, 2 vols., Oxford University Press 1976, rpt. Liberty Fund, 1981 (スミス『国富論』、水田洋監訳・杉山忠平訳、4分冊、岩波書店).
- Steuart, James [1998], *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 1767. Ed. by A. S. Skinner, 4 vols. Pickering & Chatto, London (小林昇監訳『経済の原理』、名古屋大学出版会、第1・2編、1998、第3・4・5編、1993).
- 奥山忠信 [2009]、*「ジェームズ・ステュアートの貨幣数量説批判」*、埼玉学園大学紀要、第9号。
- 小池田富男 [2009]、*『貨幣と市場の経済思想史——イギリス近代経済思想の研究』*、流通経済大学出版社。
- 堀塚文吉 [1988]、*『貨幣数量説の研究』*、東洋経済新報社。
- 馬渡尚憲 [1997]、*『経済学史』*、有斐閣。